

公立保育所保育士の成長プロセスと実践コミュニティ

——グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)と複線径路・等至性モデル(TEM)の比較から——

*香曾我部 琢・**松延 毅

Study on Growth Process of Public Nursery Teachers in Community of Practice Compare with GTA and TEM

KOUSOKABE Taku and MATSUNOBE Tsuyoshi

Abstract

In the study, the result obtained from GTA and TEM about the feature of public nursery teacher's growth process is examined by comparison by clarifying by TEM the process of having garnered the identity of public nursery teacher in daily childcare practice. Specifically, for the process of having gained the identity of public nursery teacher, a half-structured interview was performed to public nursery teacher, and the modeling was made using TEM (Trajectory equifinality model). As a result, it revealed the growth process of the public nursery teacher having garnered new identity of the public nursery teacher while being affected by important others, society, or culture, etc., through three periods of "assumption", "planning", and "conflict" after transfer. In the growth process, TEM specified the course of public nursery teacher having garnered the identity of public nursery teacher during repeated transfer by overcoming various conflicts and "fluctuation" that he had in the growth process by taking part not only in colleague of public nursery to which he belonged but in a community of practice. In comparison of GTA and TEM, while GTA could specify the aspect of the practice community being expanded by the interaction between concepts or the cycle of transfer and practice, TEM could specify in more detail the timing to interact with the practice community which generated or enhanced new relation with the others to reduce the influence due to the emotion expressed with transfer.

Key words : Trajectory equifinality model, identity, community of practice, TEM, GTA

1. 問題

自己研鑽が求められる保育者

「保育所保育指針解説書(以下解説書)」では、現代においては子どもに対する保育だけでなく、子育て支援などの新たな役割や機能を包括した保育の質の向上が保育者に求められることを示唆した。そして、保育

者が目標の実現や達成のために、いま自分に不足しているものや自らの課題を主体的に見出し、それを解決するために努力することを「自己研鑽」と定義し(解説書 p.202)、研修などを通じて日頃から自己研鑽することによって、子育て支援などの新たな役割や機能を果たすために保育者が自らの専門性を向上させること、またその研修の内容や形態、体制を精査し、体系的に

* 宮城教育大学教育学部家庭科教育講座

** 学校法人恵愛学園認定子ども園恵泉幼稚園

構築する必要性が明記された(厚生労働省2008)。

保育指針の改訂を受けて、自治体ごとに保育協議会を通じて、子育て支援、障害児保育などの多様なテーマの園外研修が整備されるようになった。園内研修においても、カンファレンスや外部講師を招いた意見交換などが取り入れられ、研修する内容や体制が充実しつつある(高杉2009)。しかし、その参加は任意であり、その研修内容や形態、その制度化はまだ途上の段階である(保育士養成課程等検討会2010)。

保育者の成長と保育者アイデンティティ

それでは、研修の内容や形態、体制を充実するために、どのように知見を得て、それらを整備していかなければならないのだろうか。高濱(2000)は、経験年数によって保育者が習熟し、熟達化している点に着目し、その熟達化の要因と構造について明らかにした。そして、日常の保育実践をもとに保育者の成長プロセスを明らかにし、そこで得た知見が初任者の研修に活用できることを示した。また、足立(2009、2010)は、現代において生じる多様で、急激に変化する問題を解決するためには、保育者の保育に対する意識自体を変容することが必要で「保育者としてのアイデンティティ(以下保育者アイデンティティ)」⁽¹⁾を再構築することが求められている状況を示した。そして、保育者アイデンティティを獲得する過程に着目することで現代の保育者の成長プロセスが明らかにでき、そこから得られた知見をもとに保育者の育成や研修を行うことの重要性を示した。すなわち、現代社会における日常の保育者の成長プロセスを保育者アイデンティティに着目し明らかにすることで、現代に生きる保育者の研修の内容や形態、体制のあり方に新たな視座を与える知見を得ることが可能であると考えられるのである。

公立保育士の成長プロセス

森上(2004)は「公立施設が一定の質を確保していくことで、公立と民営施設全体が切磋琢磨するインセンティブになる役割」、「安定した雇用により、すぐれた資質を備えた人材を育てる役割」と示したように、

保育内容や保育者の資質向上などの面において、公立保育所保育士が地域全体の保育の質を維持、向上させる役割や指標の一つとなってきたことを示している。

また、香曾我部(2012)が現代社会において急激な社会変化として少子化と過疎化の影響について示し、とくに小規模地方自治体においてその傾向が顕著であることを明示している。

以上を踏まえ、本研究では、小規模地方自治体の熟達した公立保育士を研究対象とし、現代社会においてどのように保育者アイデンティティを獲得してきたのか、その獲得してきた過程を明らかにすることで、保育者の成長プロセスについて検討を行う。この保育者の成長プロセスに関しては、既に香曾我部(2012)において、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて、その成長プロセスを明らかにしている。そこで、本研究では同じ言語データをTEMを用いて再度分析を行うことで、GTAで得られた結果と比較検討することで保育者の成長プロセスについて詳細に検討しようと考えた。

2. 分析視点と先行研究

保育者アイデンティティに関する先行研究の動向と本研究の意義

保育者アイデンティティの研究について概観すると、その数はまだ少なく(柴崎2009)、養成期の学生に心理尺度を用いた実証的な研究⁽²⁾がほとんどで、現職保育者を対象とした先行研究は数えるほどしかない。その少ない先行研究の内、西山(2006a, b, 2008)、足立(2009)の研究では同一性に関する心理尺度と他の心理尺度との相関や、変数による差異について対象としており、保育者アイデンティティを獲得する過程を対象とした研究は西坂(2009)と足立(2010)の研究だけと少ない。そして、西坂(2009)では対象者が経験年数5年から10年の保育者のみで、新任期に危機や困難な状況におかれ辞職を思ったが転機によって乗り越えた場合や、足立(2010)では、心が落ち込み、「揺らぎ」を体験し乗り越えた場合など、辞職や「揺らぎ」など困難な状況を乗り越えた際に再構築された保育者アイ

(1) 大條(2008)は、保育者アイデンティティの形成が、「理想の保育、理想の保育者」のイメージと今の自分の保育、保育者としての自分を照らし合わせ、変容させ、統合させていく作業であると示した。

(2) 田爪(2007)、小泉(2007)、西山(2006、2008)、大條(2009)、足立(2008)らによる一連の研究では、研究対象が、養成校における学生を対象としている。その方法も質問紙や加藤(1983)が作成した自我同一性尺度を用いたものである。

デンティティの獲得経験のみを研究の対象としている。

しかし、先行研究では、保育者アイデンティティを獲得するためには、実践を行う過程で何がよい保育なのか、保育について保育者同士で話し合い、保育者が一致点を見出すことの重要性や（諏訪2001）、新たな人間関係の中で他の保育者とかわることによって獲得されることが示されている（西山2008）。つまり、保育者アイデンティティは保育者個人や危機的な状況など特定の状況下のみで獲得されるものではなく、保育者として日々の保育を営む中で、同僚などの重要な他者とのかわるなかで、生涯にわたって社会的、文化的な背景や文脈の影響を受けつつ獲得されていくものと想定できるのである。

以上の保育者アイデンティティの先行研究の動向を踏まえて、本研究では、保育者アイデンティティについて、足立（2008）が示した、経験をもとに保育者自身が「保育者はこうあるべき」という自己概念を形成し、それと社会の考えを一致させていくときに得られる「私は保育者である」というアイデンティティを保育者アイデンティティであるという定義と、西坂（2009）の保育者アイデンティティが「保育者としての自己の確立であり、理想やモデルとなる保育者像と自分自身に対する理解を深め一致させていくこと」で獲得されると示した定義をもとに、「今の自分の保育を、自らが理想とする保育へと一致させていく中で獲得していく自己概念」と定義した。

そして、日々の保育実践においてどのように公立保育士が自らの理想やモデルとなる保育者像を構想し、その理想やモデルに一致させていこうとするのか、その経緯における公立保育士の感情の生起や、行動や態度などの具体的様相を、社会的、文化的文脈や背景も含めて、時間とプロセスの視点から明らかにすることで、新たな保育者アイデンティティを獲得する過程を示そうと考えた。

分析方法の選定について

本研究では、保育者の成長していく具体的様相を時間とプロセスの視点から明らかにしようと考えた。そこで、時間を捨象しないで分析を行う複線径路・等至性モデル（Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM）を用いることで、香曾我部（2012）でのグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）による分析結果との比較を行うことで、保育者の成長プロセスを時間の視点で検討しようと考えた。

TEMとは、ヴァルシナー（Valsiner）が、発達心理学・文化心理学的な観点に等至性（Equifinality）概念と複線径路（Trajectory）概念を取り入れようと創案したもので（サトウ2006）、人間の経験を時間的な変化と社会的・文化的な文脈との関係で捉え、その多様な径路を記述するための方法論的枠組みである。ヴァルシナーは、人間の成長を開放システムとして捉えることで、人が他者や自分を取り巻く社会的な状況に応じて異なる径路を選択し、多様な径路（複線径路概念）をたどりながらも、類似した結果に辿りつくという、等至性概念を用いて、人間の成長のプロセスを記述しようとしたのである。つまり、TEMを用いることで、人間の思考や行動、態度、感情の時間的な変化とその多様なプロセスを捉えることが可能なのである（中坪2010）。

そこで、本研究では、「多様な経験の径路がいったん収束する地点」を等至点（Equifinality point: 以下、EFP）として、「新たな保育者アイデンティティを獲得する」経験を位置付け、時間的な経過に伴って、等至点（EFP）に至る径路の変化やその多様性を捨象することなく記述することを目指そうと考えた。TEM用語については Table 1 にまとめた。

サンプリング法と研究協力者の選定理由

本研究では、TEMと不可分である歴史的構造化サンプリング（Historically Structured Sampling、以下

Table 1 TEMの用語の説明

| 用語 | 意味 |
|------------|---|
| 等至点：EFP | 多様な経験の経路がいったん収束する地点両極化した等至点（P-EFP） 等至点を一つのものとして考えるのではなく、それと対になるような、いわば補集合的な事象も等至点として研究に組み入れ、意図せぬ研究者の価値づけを未然に防ぐ |
| 分岐点：BFP | ある選択によって、各々の行動が多様に分かれていく地点 |
| 必須通過点：OPP | 論理的・制度的・慣習的にほとんどの人が経験せざるをえない地点 |
| 社会的方向づけ：SD | 個人の望む選択肢ではなく、望んでいない特定の選択肢を選ぶように仕向ける、環境要因や文化的な力の総体 |
| 社会的促進：SG | SDに対抗し、個人の望んでいる行動を選択肢を選ぶように支援する、環境要因や文化的な力の総称 |

HSS)を用いる (Valsiner 2006)。HSS では研究の目的である特定の経験を等至点として、その経験をした者を選定する必要がある。つまり、本研究では公立保育士が「新たな保育者アイデンティティの獲得する」経験を等至点とするため、HSS にもとづき、保育者アイデンティティを獲得していると考えられる保育者を選定する必要がある。そこで、本研究では「新たな保育者アイデンティティを獲得する」経験をした保育者として、現在、公立保育所に30年以上保育経験がある熟練期の保育者で、研究主任として主導的に保育所の保育に携わった保育者を研究協力者として選定することとした。理由は、研究主任になると保育所全体の年間の保育実践と研究活動について、他の保育者へ提案を行うことが求められ、新たな保育実践を構想する経験を経ていると考えられたためである。なお、熟練期の定義については、西山 (2006) と足立 (2010) をもとにし、研究協力者の経験年数と面接時間は Table 2 に示した。そこで、現在、公立保育所に勤務し、所長や副所長、研究主任など主導的な役割を担っており、経験年数が30年以上で熟練期にある公立保育士 6 名を研究協力者とした。

Table 2 研究協力者・面接時間・職位一覧

| | A | B | C | D | E | F |
|------|-------|---------|-------|---------|-------|-------|
| 経験年数 | 38 | 36 | 32 | 38 | 39 | 34 |
| 面接時間 | 2h15m | 2 h 57m | 1h56m | 1 h 56m | 1h12m | 1h24m |
| 面接回数 | 5 | 5 | 4 | 3 | 2 | 2 |
| 職位 | 所長 | 副所長 | 副所長 | 所長 | 所長 | 副所長 |

語りデータの収集方法と分析の手続きについて

本研究では、公立保育士 6 名に対して、半構造化インタビューを実施し、保育者アイデンティティの獲得に関する語りを引き出し、それを分析の対象にしようと考えた。本研究では、先に示したように保育者アイデンティティを、足立 (2008) 西坂 (2009) らの定義をもと

Table 3 質問項目

| |
|--|
| ① これまで取り組みたいと思った保育実践はどのようなものか (理想とする保育) |
| ② この保育実践をしたいと考えるようになったのはいつごろか (その時期) |
| ③ それを考えるようになったきっかけは (その要因) |
| ④ この保育実践をするために求められる資質や専門性とはどのようなものか (実現に必要な資質) |
| ⑤ この保育実践を行う際に生じた問題や障害 (少子化の影響) |

に、「今の自分の保育を、自らが理想とする保育へと一致させていく中で獲得していく自己概念」と定義した。そこで、まず、「①保育者が現在 (過去に) どのような保育実践を行いたいと思っている (た) のか」を語ってもらうことで、理想とする保育を構想した経験の有無とその具体的な保育内容について明らかにしようと考えた。そして、次に②の質問でその保育実践を構想した時期を、③の質問で理想とする保育実践を考えるようになった契機を、④の質問で理想とする保育実践を実現する際に求められる (た) 保育者の資質 (理想とする保育者像) についての語りを引き出すことで、理想とする保育を具体的にどのように実現したのか、そのプロセスやそこで保育者に求められる資質や専門性について明らかにしようと考えた (Table 3 参照)。

収集した語りデータは、(A) 6 名の研究協力者の語りデータをもとに分析の基本的枠組みとなる TEM 図を作成する。次に、(B) 研究協力者一人一人の語りデータから基本的枠組みを用いて事例を抽出する。そして、(C) 事例を基本的枠組みによって分類し、(D) 分類ごとに分析し、考察を行う。最後に、(E) すべての事例の TEM 図を統合し、新しい保育者アイデンティティの獲得過程のモデル化を行い、それをもとに総合考察を行う。

4. 結果と考察

(1) 分析の基本的枠組みの設定

本研究では、Table 4 に示したように、保育者アイデンティティを「今の自分の保育を、自らが理想とする保育へと一致させていく中で獲得していく自己概念」と定義した。つまり、保育者が新たな保育者アイデンティティを獲得する過程は、自らが理想とする保

Table 4 本研究における TEM 用語の意味

| 用語 | 本研究における意味 |
|------------------|--|
| 両極化した等至点 : P-EFP | 1. 「新しい理想とする保育実践に挑戦する」ことで「保育者アイデンティティを形成」する。 2. 「これまでの保育実践を踏襲する」ことで「保育者アイデンティティの拡散」に陥る。 |
| 分岐点 : BFP | 1. 1、2 年目の気づき 2. 保育者として葛藤する自分 |
| 必須通過点 : OPP | 1. 異動の予感 2. 異動する 3. 新たな理想とする保育実践を構想する |

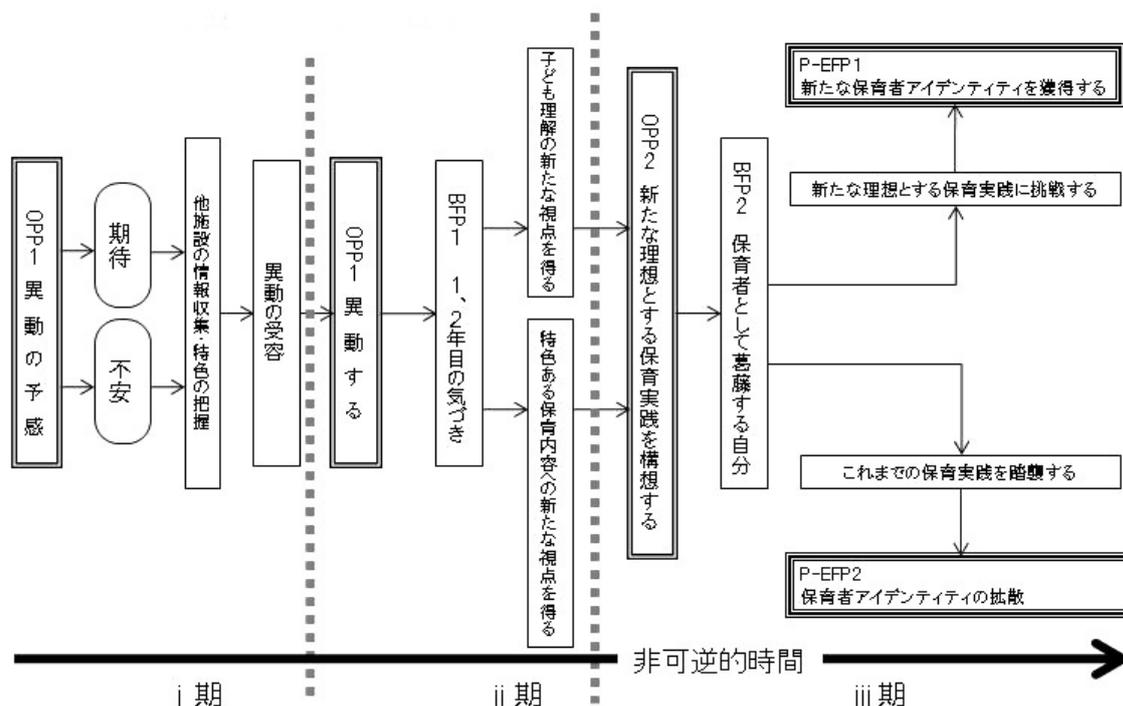


Figure 1 分析の基本的枠組み

育実践に挑戦し、それを継続的に実践する経験によっていったん収束すると考えられる。そこで、「新たな理想とする保育実践に挑戦する」ことを継続することで「新たな保育者アイデンティティを獲得」することを等至点 (P-EFP1) として位置づけた。さらに、新たな理想とする保育実践を構想したもの、葛藤しつつも実際にはその保育所の保育実践を踏襲せざるを得なかった経験が示された。そこで、「これまでの保育実践を踏襲する」ことで「保育者アイデンティティの危機」に陥る場合も想定し、両極化した等至点 (Polarized-EFP, 以下 P-EFP1, 2) を設定した。

等至点について認識した上で、6名の語りデータを読み返すと、「新たな理想とする保育実践に挑戦する」前に、必ず保育者すべてが新たな理想とする保育を自分なりに発案し、実践の中でその構想し、その構想を抱きながら葛藤する姿が語られていた。そこで、「新たな理想とする保育実践を構想する」経験を必須通過点 (OPP)、「保育者として葛藤する自分」を分岐点 (BFP2) とした。

また、「新たな理想とする保育を構想する」前に、それぞれの保育者が異動してから1年もしくは2年の間に、前の保育所での保育実践と今の保育所での保育実践の間にある差異に気づき、これまでの自分にはな

かった視点で保育実践を捉えることで新たな保育実践を構想する姿が示された。そこで、この気づきの契機となった「異動する」経験を必須通過点 (OPP2)、「1, 2年目の気づき」の経験を分岐点 (BFP1) と設定した。さらに、分岐点 (BFP1)「1, 2年目の気づき」の後に、そこで得た気づきによって、子どもをこれまでとは違う視点で捉えることが可能になり、「子ども理解の新たな視点を獲得」ことで新しい理想とする保育を構想する場合と、その保育所を取り巻く環境の特色を捉えて、「特色ある保育内容への新たな視点を獲得」ことで、新しい理想とする保育を構想する場合が存在し、この2つの径路から必須通過点 (OPP3)「新たな理想とする保育実践を構想する」に至ることが示された。

さらに、必須通過点 (OPP2)「異動する」以前に、保育者が自らの異動を予感していることが示され、その予感によって保育者が次の異動に対して期待している場合と、不安になっている場合の2つの感情が表出することが示された。この2つの感情は、その後の情報収集によって次第に受容されていった。そこで、必須通過点 (OPP1)「異動の予感」と必須通過点 (OPP2)「異動の受容」を設定し、さらに、その間に「期待」、「不安」の経路と「情報収集・特色の把握」を示した。

以上のように「等至点」、「必須通過点」、「分岐点」

を設定し図式化したものを Figure 1 として示したが、さらに本研究では事例の多様性、個別性を検討するために、径路において分岐点が生じる点に焦点を当てようと考えた。そこで、OPP1「異動の予感」から OPP2「異動の受容」までを【第 i 期】、OPP3「異動する」から OPP4「新しい理想とする保育実践の構想する」までを【第 ii 期】、OPP2以降から両極化した等至点までを【第 iii 期】と 3 期に分けて分析を行った。

(2) 事例の抽出と分類

基本的枠組みで分析したところ保育者アイデンティティを獲得した経験として、17 事例を抽出することができた。この 17 事例のうち、【第 i 期】において「期待」する感情が表出した事例が 8 事例、「不安」の感情が表出した事例が 9 事例で、【第 ii 期】において「子ども理解の新たな視点を得る」径路を示したのが 10 事例、「特色ある保育内容への新たな視点を得る」径路を示したのが 7 事例であった。さらに、17 事例のうち、【第 iii 期】において「新たな理想とする保育実践に挑戦する」ことで「新たな保育者アイデンティティを獲得」することを両極化した等至点 (P-EFP1) に至る事例が 11、「これまでの保育実践を踏襲する」ことで「保育者アイ

Table 5 事例の分類

| | 新たな理想とする 保育実践に挑戦する | | これまでの保育実践を 踏襲する | |
|----|-----------------------|-----------------|--------------------|--------|
| | 子ども理解 | 特色ある保育 | 子ども理解 | 特色ある保育 |
| 不安 | A2、C1、 D2 | A1、D1、 E2、D3 | A3、C2 | E1 |
| 期待 | B1、F2 | B3、E1 | E3、C3 | B2、F1 |

※ A1 とは、研究協力者 A が示した 1 つ目の事例を示す。

ンティティの危機」に陥った事例が 6 であった。この 17 事例を分類した表を Table 5 に示した。

(3) 事例の検討

本節では、異動を契機に、非可逆的な時間軸に沿って新しい理想とする保育実践を構想し、その新しい理想とする保育実践に挑戦し、新しい保育者アイデンティティを獲得していく径路の個別性や多様性を捉えるために、事例 A1 と B1、C2 と F1 を取り上げる。その理由として、A1 と B1 を取り上げることで【第 i 期】、C2 と F1 を取り上げることで【第 ii 期】、さらに以上の 4 事例から【第 iii 期】の径路の多様性について明らかにし、事例の個別性を示すことが可能であると考えた。本文中のテキストは、研究協力者が語った語りデータから抜き出したもので、直接引用した語り

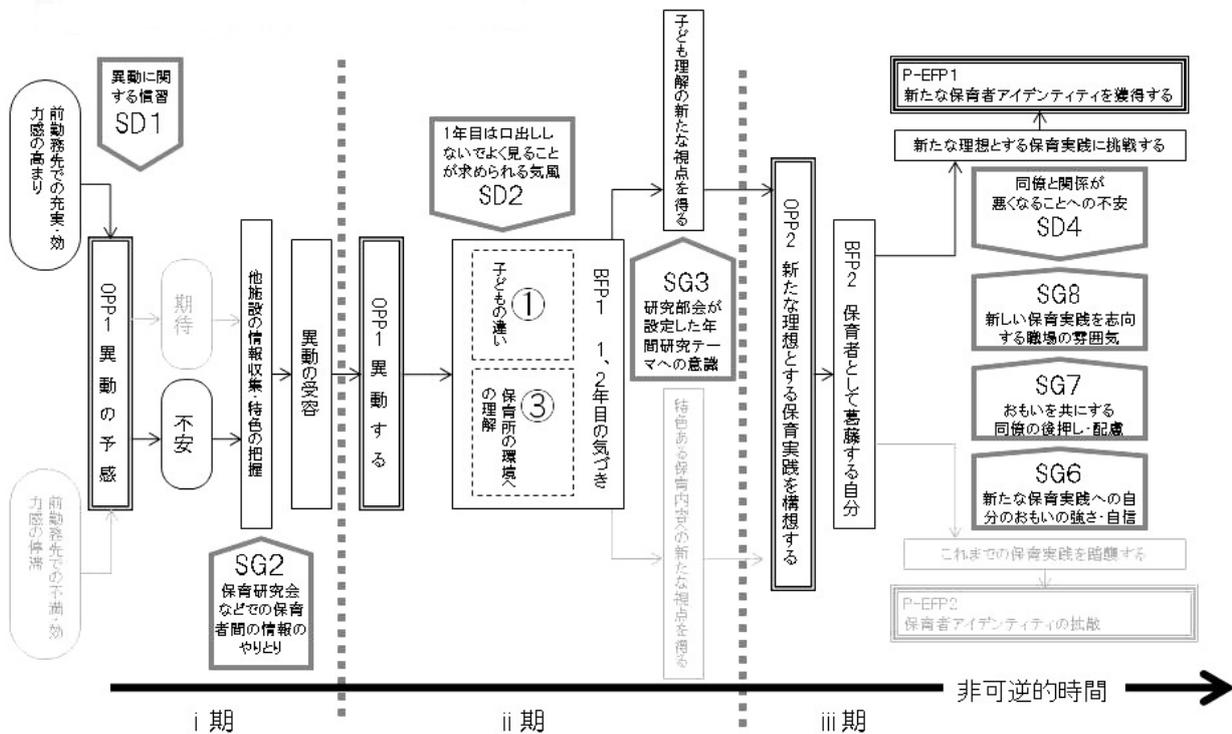


Figure 2 《事例 A1》の TEM 図

についてはゴシック体で記した。また、取り上げた事例の径路を示した TEM 図を Figure 2～5 に示した。

【第 i 期】

《事例 A 1 (Figure 2)》不安の感情から受容へ

保育者 A は、異動する以前に勤務していた中規模の a 保育所で15から20名程度適度な子どもの人数を担当していた。当時は、教育要領の改訂などの影響もあり、公立保育所でも教師主導のクラス活動を中心とした保育から、遊びを中心とした保育へと移行していた時期であった。a 保育所はこの自治体の中では、中規模の保育所であったが、研究面では自治体の研究会では公開保育を行うなど、自治体の中で主導的な役割を担っていた。そのため、遊びを中心とした保育をその自治体ではさきがけて導入しており、保育者 A はその導入において研究部に所属し中心的な役割を担っていた。

そのため、勤務して4年目であった保育者 A は、保育者が3～6年で異動することが多いため、年度末に行くに従って、今年は異動すると予感を強めるなかで、次も大規模の保育所に行ったら、また教師主導の保育に戻ってしまうのではないかと、大人数の子どもたちに対して遊びを中心とした「aの保育」ができるかどうか、といった不安をいだくようになった。しかし、研

究室などでの保育者から情報を得て、大規模保育所の情報を得ることで、この不安の感情は次第に解消され異動を受容していった。

《事例 B 1 (Figure 3)》期待の感情から受容

保育者 B は、初任から勤務していた保育所がすでに6年目になっており、かつ今年は、年長担任ということもあり、d 保育所を異動することを予感していた。d 保育所では、自分より若い保育者がいなかったために、先輩の保育者の言うことを聞くことが多く、自分からしたい保育を提案することができないような状況にいた。そのような中で、保育者 B は次第に異動することに期待を寄せて、保育研究会で参観した e 保育所の保育に異動を受容していく。

考察 i：異動に関する慣習が生み出す異なる感情とその意味

以上の事例から、【第 i 期】では、自ら異動を予感し、他の保育所に異動したらどうなるのか想定し、特定の感情を抱きつつも、他の保育所の情報を得て、自らの保育を確認する保育者の存在が示された。そこで、この時期を【確認期】とした。

この2つの事例では、勤続年数3年から5年や年長担任が異動の対象となるという慣習から、自らがこの

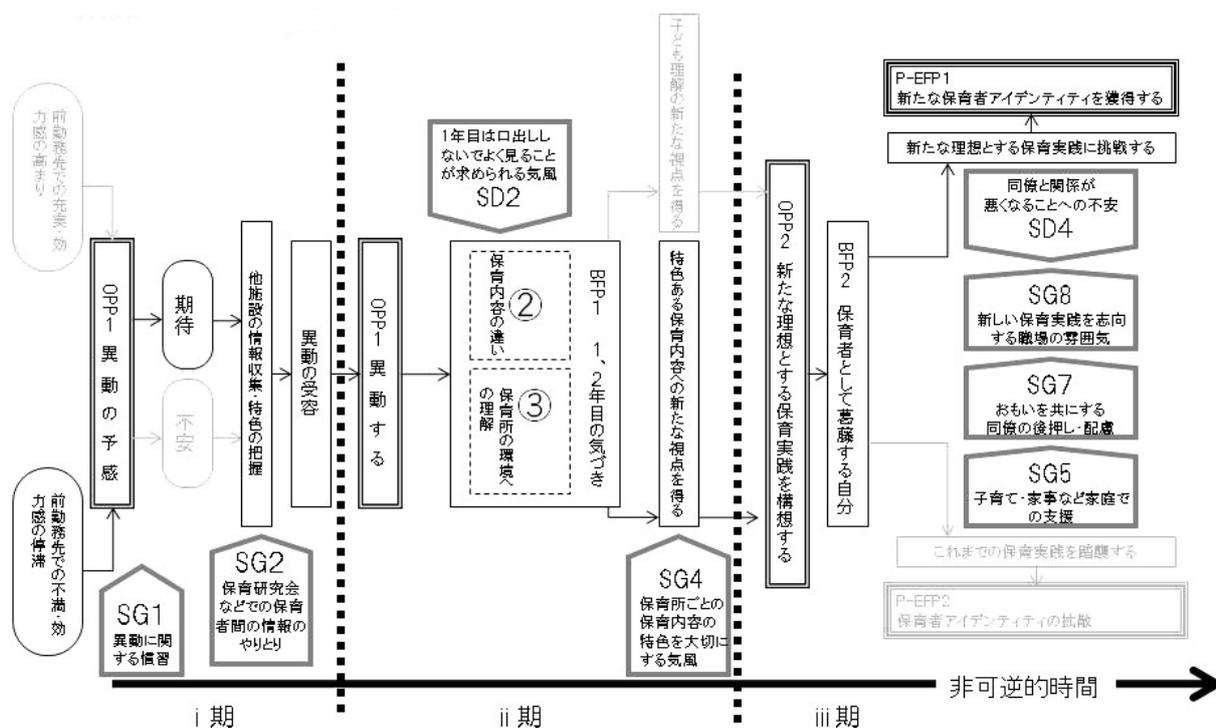


Figure 3 《事例 B 1》の TEM 図

条件に当てはまると、自分が異動することを予感し、事例A1では、それによって「不安」の感情を表出させ、事例B1では「期待」の感情を表出させている。この感情の違いは異動前の保育所での充実感や不満の度合いが分岐の原因となっている。そのため、「勤続年数が3～5年目で、年長クラス担当の保育者が異動の対象となるという慣習」が、新たな保育者アイデンティティを獲得することを促す社会的促進、逆にそれを抑制する社会的方向づけ、どちらにもなりうることを示された。そこで、本研究では「異動の予感」を生み、異なる2つの感情を生み出す「異動に関する慣習」を社会的促進(SG1)、社会的方向づけ(SD1)の両方に設定し、「異動の予感」の経路の前に「前勤務先での充実・効力感の高まり」、「前勤務先での不満・効力感の停滞」の経路を設定した。

この【確認期】では、いずれの感情の経路においても、保育研究会や他の保育者を通じて収集した情報によって、異動することが受容されていくが、その過程において、自らがやってきた保育実践の良さや特徴、短所などについての語りが見られた。西坂(2009)は、新たな保育者アイデンティティを獲得するためには、「保育者自身が保育に対する価値観や自らの保育そのもの

のを捉えなおす過程が、重要なプロセスとしてある」と述べ、自らの保育実践を認識し直すことの重要性を指摘している。すなわち、異動に関する慣習によって異動の予感を得た保育者が、次の施設での自らの保育実践を想定しつつ、異動することを受容する過程で、今の自らの保育について確認するこの【確認期】は、新たな保育者アイデンティティを獲得するための準備段階として重要であると考えられるのである。

【第ii期】

《事例C3 (Figure 4)》子どもの違いへの気づきと同僚との出会いから子ども理解の新たな視点へ

保育者Cは、b保育所に異動して1カ月もすると、b保育所の子どもたちがトラブルの際に使う言葉が気になりはじめた。前に勤務していたe保育所の子どもたちと比較して、「バカ」、「嫌い」などとトラブルの際に使う言葉が荒っぽく、それも大きな声でかなり威圧的な態度であったからだ。トラブルはさほど変わりはないが、互いが主張してなかなかゆずらないので、解決するまでに時間が長い。トラブルに対する対処について悩み始めてから2カ月後、保育者Cは違う学年の年配の保育者Gと次第に関係を深め、話しをするようになった。

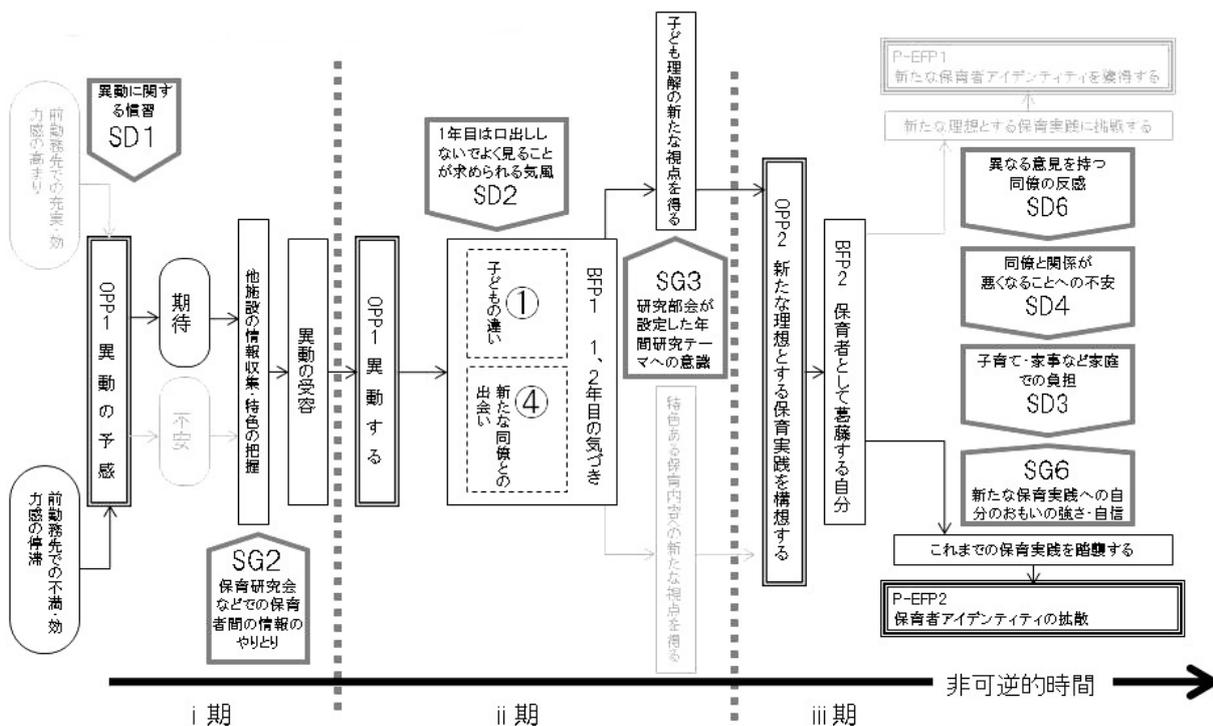


Figure 4 《事例C3》のTEM図

これ以来、子どもの違いに気づき、それをよく理解しようとする前向きになった。そして保育者Gがトラブルのときに、どんな言葉をかけているのか、保育者Gの保育している姿をよく観察したり、そこで保育者Gがどんなことを考えていたのかを聞いたりするようになった。そして、保育者Gが子どものトラブルを解決する際に、その子どもの性格や遊びの経緯を理解した上で、さらに次の遊びの展開も視野に入れて言葉をかけていることを次第に知っていった。これまで、保育者Cはトラブルの原因がだれにあるのか、犯人探しになっていたことを反省して、保育者Gを見習って遊びでの子ども思いを読み取ることの重要性について認識を新たにし、新たな保育を構想していく。

《事例F1 (Figure 5)》自然環境、保護者・地域の気付きから生み出される特色ある保育内容への新たな視点

保育者Fは、都市部で大規模のa保育所から小規模のe保育所に異動してきた。異動してきて子どもが少なく戸惑ったり、自然の豊かさに驚かされたりしたが、次第に、日々の保育を重ねるなかで自然環境を大切に、それをうまく取り入れた保育に面白さを感じていった。また、日常的に保育所の活動に協力してく

れるお年寄りや保護者が多いのに驚きつつも、地域の人々と信頼関係を築いていった。

保育所の自然環境を使った保育内容や地域の特色などの違いに気付くなかで、保育者Fは、豊かな自然環境や地域の人々と触れ合えることができる保育実践をしたいと考えるようになっていく。運動会や発表会などの大きな行事だけではなく、地域のお年寄りが耕作している畑に日常の散歩でうかがったり、保護者を先生にした制作遊びなどを取り入れたりした特色ある保育に思いを寄せていく。

考察 ii : 差異に気づく力と保育者効力感

この時期、施設への理解だけではなく、その施設を取り巻く地域社会の自然や住宅環境、保護者の人柄などの特色を理解していく。この理解の過程で、新たな理想とする保育実践への気づきを得て、その構想を形成していく。そこで、本研究ではこの時期を【形成期】とし、TEM図に示した。

Figure 4、5からわかるように、保育者は異動してから「SD2 1年から2年の間は口出ししないでよくみることが求められる慣習」が社会的方向づけとなって、異動後の保育実践を前の保育実践と比較しつつよく観察することが求められる。そして、この間に前の

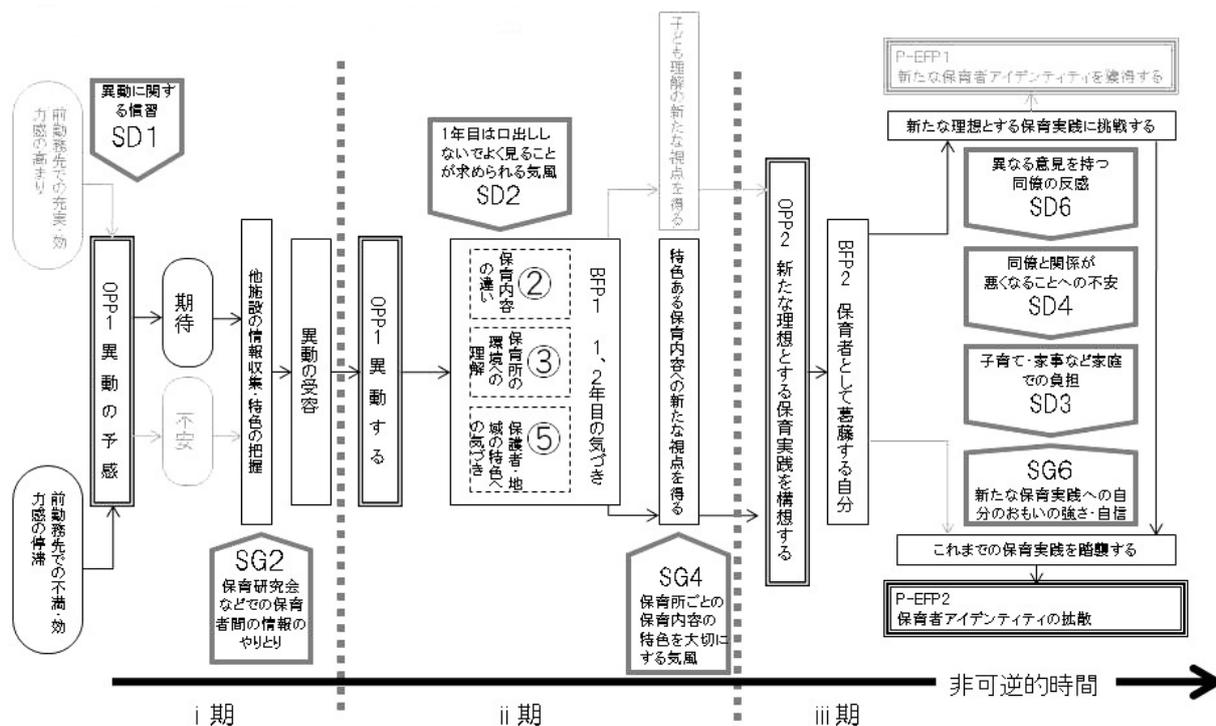


Figure 5 《事例F1》のTEM図

保育実践と異動後の保育実践との差異を見出し、新たな理想とする保育実践を構想する気づきを得ている。保育者が他の保育者を観察することについては、西山(2006b)が、初任者が他の保育者を観察することで自らの保育に見通しや自信を持つことを示して、「他者の行動を観察すること」によって保育者効力感⁽³⁾が変動することを示した。

さらに、西山(2008)は、保育者に対して多次元自我同一性尺度(谷2001)と多次元「人間関係」保育者効力感尺度(CPE-HR25:西山2006b)を用いて共分構造分析を行い、保育者の経験年数を問わず、保育において幼児の人とかかわる力を育むことに関する保育者の効力感と保育者アイデンティティとの間に比較的高い正の相関が存在することを示している。すなわち、この形成期のはじめの1年から2年の間、保育者は他の保育者を観察しているだけで、何もしていないように見えるが、それだけではなく、観察することで保育者は自らの保育者効力感を高め、さらに保育者効力感が高めることで新たな保育者アイデンティティを獲得するための原動力と蓄えていると考えられるのである。

【第Ⅲ期】

《事例 A1 (Figure 2)》

中規模の保育所から、大規模の保育所へ移動し、子どもが大人数でもアイデアを出し合いながら遊びを繰り広げていく姿をみて、保育者Aは子どもがもっと自分たちで遊びを繰り広げられるように、子どもが自由にいろいろな素材や道具を保育室に用意し、ゆったりと制作しながら、友達とイメージを出し合えるような空間構成を取り入れたいと考えようになった。しかし、自分のクラスだけでやることはできず、同僚に相談した。その後、特定の保育者との関係悪化に不安を抱きながらも、その同僚の後押しや職場の雰囲気、自らの自信を感じながら、新しい環境構成を保育実践で挑戦していった。

この新しい環境構成で子どもたちが自発的に遊ぶ姿を見て、他の学年も同じような環境づくりをはじめようになっていった。

《事例 C3 (Figure 4)》

トラブルの対処について悩んだ体験から、子どもの遊びへの思いを読み取りつつ、その遊びで起きたトラブルを解決するだけでなく、そのトラブルをきっかけに子ども同士が理解し合い、さらに遊びが広がっていくような保育を新たに構想していった。とくに、子どもの遊びを理解するために、日々の保育記録として事例を書くことを提案しようとするが、ただでさえ忙しい状況で、記録を書くことで仕事が増やすことになる。それに異なる意見を持つ同僚の反感や、家庭での家事の増大に対する負担感への思い、一方では、新たな保育実践をやってみたいという強い思いがあり、この2つの思いの間で葛藤する。

この葛藤の中で、保育者Cは結局、記録を採って、その記録をもとに話し合いを進めていこうという新しい保育実践を諦め、これまで同様に今日あったできごとを話し合うやり方を踏襲した。

《事例 F1 (Figure 5)》

保護者や地域の人々とのかかわりを日常の保育実践に取り入れることで、もっと子どもたちがいろんな経験を積むことができるのではないかと保育者Fは考え、新しい散歩コースや保護者参観の際に保護者が先生になった子どもと一緒に製作する機会づくりなど、新しい理想とする保育実践を構想した。しかし、子どもだけの時間をもっと豊かにする必要があるという意見を持つ保育者Hとの対立や地域の人々や保護者との連絡の手間などへの気力、体力への不安があり、なかなか踏み出せない。そんな中、他の保育者から助言を受けて思いを強め、実施することになった。

しかし、手間が思ったよりもかかったせいで散歩や保護者参観のときに実践しただけで、この保育実践は終わってしまい、これまでの散歩コースや保護者参観の形態に戻し、これまでの保育実践を踏襲することとなった。

考察Ⅲ：重要な他者や社会的文脈が選択に与える影響

この第Ⅲ期では、構想を形成し、それを実践しようとする際に、保育者が「挑戦したい」と「諦めよう」

(3) 効力感とは、Bandura (1977) が提唱したもので、外界に対して自分が何らかの働きかけができるという感覚を指し、行動と関連する。西山(2008)は「効力感の強い者は実践を活発に行い、自分の能力を生かすことができるが、逆に効力感の弱い者は積極的な実践を避け、不十分な活動に終始してしまう」と示している。

とする2つの感情の間で葛藤しながら、選択している姿が見られた。そこで、本研究では、この時期を【葛藤期】と示した。

Figure 2、4、5で示したように、保育者が葛藤の中で、自分の構想した新たな理想する保育実践を行うことを判断する際に、新しい保育実践にかける思いや家庭環境、体力など自分に関する要因だけではなく、同僚の保育者の反応や保育所の雰囲気などの社会的、文化的な文脈などの要因にも影響を受けて、選択を行っていることが明らかとなった。片桐（1999）がアイデンティティ獲得において他者や社会との相互作用の重要性を示しているように、この葛藤期にで、保育者が他の保育者や家族などの重要な他者と相互作用することは、保育者アイデンティティを獲得する上で重要な経験であると考えられる。

5. 総合考察

本章では、基本的枠組み（Figure 1）で分類した全ての事例のTEM図をもとに、保育者アイデンティティを獲得する過程を複線径路・等至点モデルという記述モデルを用いて示す。そして、異動への予感をきっかけとして生起し、葛藤を過て両極化した等至点へと収束していく保育者アイデンティティを獲得するプロセスの多様性を捉える。

分析の基本的枠組みとして示したFigure1のTEM図に、各事例で示された保育者の選択に判断に影響を与えた社会的促進と社会的方向づけを加え、Figure 6を作成した。さらに、Figure 6は、公立保育所で経験年数が35年以上で、協力者以外の保育者2名とともに、6名のそれぞれが辿った経験の径路や可能性の径路を加え、精査を行うことでモデルの妥当性を検討し、再構成したものである。

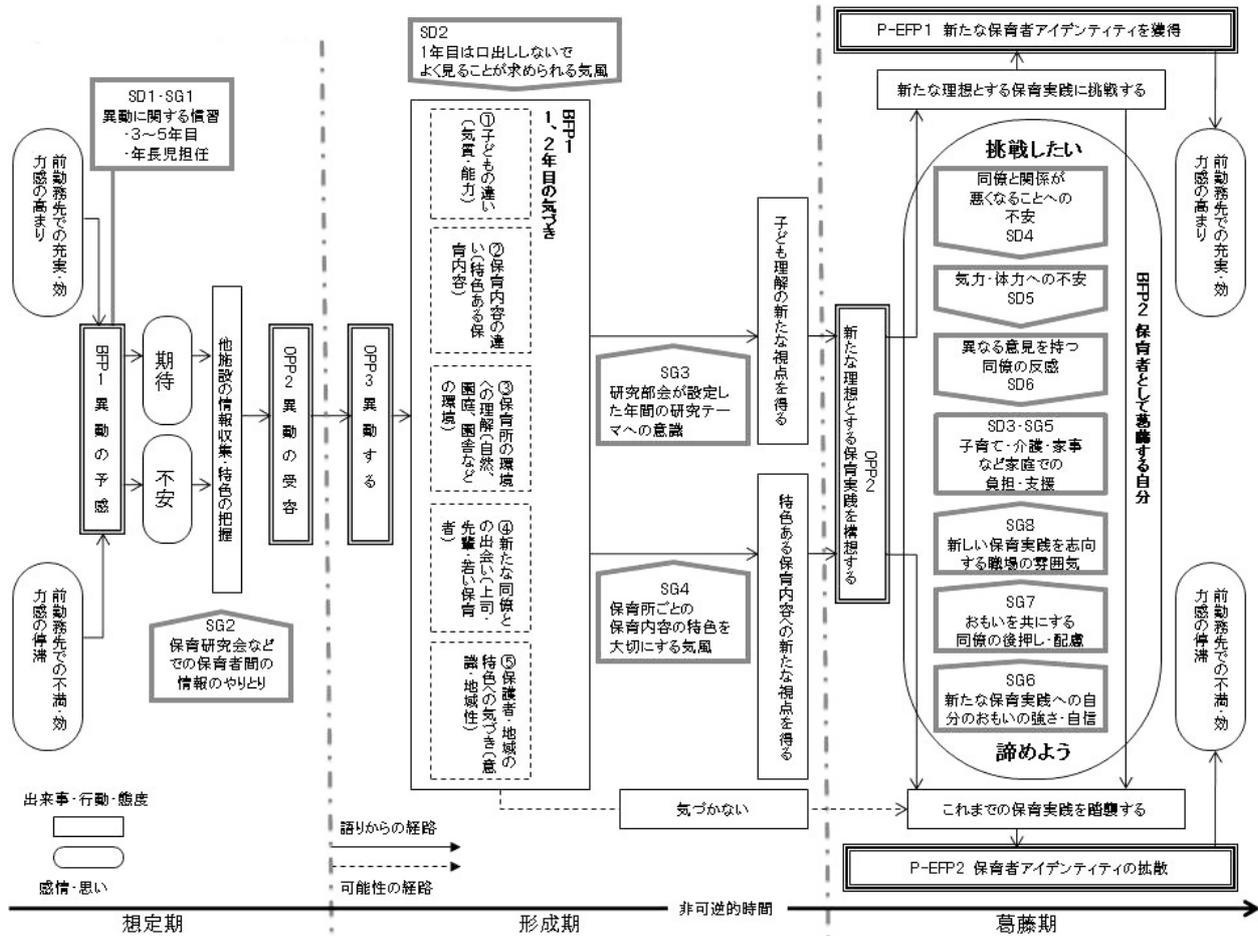


Figure 6 6名の統合TEM図

Table 6 社会的方向づけと社会的促進の意味

| | |
|------------|--|
| 社会的方向づけ：SD | <ol style="list-style-type: none"> 1. 異動に関する慣習（3年から5年、年長児を担当した年に異動する） 2. 1年目は口出ししないでよく見ることが求められる気風 3. 子育て、介護、家事などの家庭での負担 4. 同僚との関係が悪くなることへの不安・自信の無さ 5. 気力・体力への不安 6. 異なる意見を持つ同僚の反感 |
| 社会的促進：SG | <ol style="list-style-type: none"> 1. 異動に関する慣習（3年から5年、年長児を担当した年に異動する） 2. 保育研究会などでの保育者間の情報のやりとり 3. 研究部会が設定した年間の研究テーマへの意識 4. 保育所ごとの保育内容の特色を大切に作る気風 5. 子育て、介護、家事などの家庭での支援 6. 新たな保育実践への自分のおもいの強さ、自信 7. おもいを共にする同僚の後押し、配慮 8. 新しい保育実践を志向する職場の雰囲気 |

「揺らぎ」と保育者アイデンティティ

これまでの保育者アイデンティティに関する先行研究の多くでは、心理尺度を用いた実証的な研究であることから理解できるように、保育者アイデンティティの獲得はあくまでも個人内の出来事として認識され、それを獲得する要因は保育者個人の資質に帰してきた。

しかし、本研究で示した Figure 6 や考察から、保育者が他の保育者や研究会などの組織、家庭や地域などの社会の影響を強く受けつつ、それが社会的方向づけ、社会的促進となって自らの経験を選択することで多様な径路を経て保育者アイデンティティを獲得していることが理解できる。とくに、【確認期】では不安や期待の感情を抱いたり、【形成期】ではこれまでの保育実践との差異に悩んだり、戸惑ったり、【葛藤期】では自分の思いと他者との思いの狭間で葛藤したりと、各期において様々な社会的方向づけ、社会的促進によって心を揺れ動かす保育者の姿が示され、それを周囲の他者や組織とのかかわることで乗り越えて、保育者アイデンティティを獲得していることを TEM 図 (Figure 6) として可視化した。

保育者アイデンティティの獲得する過程において「揺らぎ」⁽⁴⁾を乗り越えることが重要である一方で、その「揺らぎ」も度が過ぎたり、支えとなる人的・物的環境がなかったりすると、保育者アイデンティティの混乱や再構築できない状態を生み出す原因となる（足立2010）。本研究では TEM モデルによって、「揺らぎ」の要因となる社会的方向づけを、その時間の流れの中で捉え、それを可視化し、保育者アイデンティティを

獲得する過程を生涯発達の視点から描き出した。この TEM 図は研修の内容や形態、体制などに対して示唆を与えることが可能である。例えば、【確認期】では、自治体で実施している保育研究会が情報収集の場として機能することで、保育者が異動への「不安」という「揺らぎ」を乗り越え、異動を受容するために有効であったことを示した。この結果から、自治体などで実施する保育研究会の研修内容に、互いの保育実践についての情報交換やカンファレンスなどの場を設けることの有効性を示唆することができる。また、【葛藤期】では、それぞれの保育者が「挑戦しよう－諦めよう」と葛藤する際に、社会的方向づけや社会的促進が保育者によって複数絡み合ってその選択に影響を与えることが示された。この結果から、保育者が「揺らぎ」を乗り越えるためにはその保育者の社会的な状況の個別性を認識した上で研修の内容や形態、体制を組む必要があることが理解できる。このように、TEM モデルのもとに、保育者の「揺らぎ」を乗り越えるための、研修や園内での同僚性の在り方など組織的、体制的な様々な手立てに対する知見を得ることが可能なのである。

保育所の組織アイデンティティとの関連性

以上に示した Figure 6 と考察から、保育者の成長が保育者個人の自己研鑽によって、個人内だけで育まれるものではなく、他者や組織の在り様、それを取り巻く社会や文化などの多様ななかかわりの中で促され、育まれるものであることが理解できる。つまり、保育者の成長は、自己研鑽と呼ぶような個人内の出来事では

(4) 足立 (2010) は、この心が揺れ動く様相を「揺らぎ」と定義している。

なく、その保育者の所属する組織や社会、文化という枠組みの中で捉える必要があるのである。

事例 A1 で、保育者 A が異動前の保育所で充実感を感じた保育実践を「a の保育」と保育所名を付けて総称して語る姿が示されたが、A1 のように、【確認期】において、異動前に所属した保育所で行った保育実践に充実感を感じており「不安」の感情を表出させた事例 (Figure2 参照) では、異動前の自らの保育実践を「○の保育」と呼び、その保育実践の特徴や他の保育実践との差異について語る姿が多く見られた。このように、ある組織の中核的な特性、他の組織との区別、継続性についての認識を「組織アイデンティティ」(Albert&Whetten1985) と呼ぶ。この「○の保育」についての語りから、その保育所に所属する保育者集団が組織アイデンティティを獲得していることが理解できる。すなわち、保育者アイデンティティを獲得することは、組織アイデンティティと相関性が存在すると考えられるのである⁽⁵⁾。

また、佐藤 (2004) は組織アイデンティティの基礎が「成員性の認知 (自分が特定の集団のメンバーであって、他の集団のメンバーではないという点に関する自己認識)」それ自体であると述べ、共有された価値や目標、機能的な相互依存性やメンバー相互の魅力などは本質的な部分では大した意味を持たないと示している。しかし、保育所保育指針解説書では、保育所の組織性については、「理念や方針などの共通理解、個人の主体性や意欲、職員間の信頼関係と協働性、評価や研修等の計画的実施などの要素」について示すのみで、保育所の組織アイデンティティの基礎となる保育者の「成員性の認知」に関して一切指摘していない。先に示した研修の在り方などと含めて、保育所の組織アイデンティティ、その基礎となる保育者の「成員性の認知」の形成については、今後の研究課題となろう。

6. さいごに

TEM と GTA の比較による詳細な検討

本研究と香曾我部 (2012) の研究結果を比較する。まず、それぞれの分析方法の長所について説明すると、香曾我部 (2012) の GTA による分析では、異動を繰

り返すこと (異動サイクル) によって、その度に保育者自らが所属する実践コミュニティを拡大させていく様相と、その拡大が保育者の成長に与える影響の大きさを図によって明示することができた。また、日々の保育実践を通じてさまざまな気づきを得たり、葛藤を抱いたりつつ実践を繰り返すこと (実践サイクル) でその葛藤を乗り越えようとしている保育者の揺らぎを図式化することができた。つまり、以上の点から、GTA を用いることによって、類似した状況における類似した経験を包括的にまとめることが可能となり、その経験での共通した概念構造を明らかにすることで、人間の成長や成長を価値づける構造を明らかにすることができると考えられる。

一方、本研究の TEM による分析では保育者が所属している組織の雰囲気や志向性といったものが、保育者アイデンティティの形成プロセスにおいて、どのタイミングで保育者に影響を与えたのかを、社会的促進 (SG) や社会的方向付け (SD) によって明確に示すことができた。さらに、Figure2~4 で示したように保育者一人一人の TEM 図を描くことで、その保育者一人ひとりがおかれた社会的な状況の違いや、葛藤の質的な違いなどを明示することで、その保育者特有の保育者アイデンティティの形成プロセスを描くことの可能性が示された。

以上の点から、GTA では類似した出来事や経験を繰り返すことで、その繰り返しによってうながされる相互作用をマクロなレベルで捉え、その事象を支える価値構造や概念構成を知ることが可能となる。それに対して、TEM では、同じ出来事や経験として捉えてしまいがちな類似した事象を、その事象の社会・文化的な背景の違いも含めて、その個別性をメゾ・ミクロレベルで明らかにすることが可能となることが明らかになった。境 (2012) らが行った子どもの遊び場面の事例を分析対象とした TEM と M-GTA の比較に関する研究においても、「相補的に用いることで、現象理解をより深めることができる可能性」を指摘し、TEM で現象が生起するプロセスを明らかにし、その現象の全体構造を M-GTA (修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ) で詳しく分析できる可能性を示唆している。

M-GTA と GTA の相違点については、木下 (2003)

(5) 佐藤 (2004) は、組織アイデンティティと個人アイデンティティとが拮抗関係にあることを示唆している。

がデータの切片化の有無（M-GTA は切片化自体を行わない）を取り上げているように、その分析過程における分析の緻密さがGTAの特徴として示されている（戈木2006）。その点から考えると、GTAを用いることによって、より詳細に構造を捉えることが可能であると想定でき、保育者の成長プロセスの個別的な側面をより明示することが可能と考えられる。この点については、さらに今後の課題として研究を進めていくことが求められる。

引用文献

- 足立里美 2008 実習園が求める「実習生らしさ」が実習性の保育者アイデンティティの形成に及ぼす影響 保育士養成研究26, 1-10.
- 足立里美・柴崎正行 2009 保育者アイデンティティの形成と危機体験の関連性の検討 乳幼児教育学研究18, 89-100
- 足立里美・柴崎正行 2010 保育者アイデンティティの形成過程における「揺らぎ」と再構築の構造についての検討－担当保育者に焦点をあてて－ 保育学研究48 (2), 107-118.
- Albert, S. & Whetten, D. A. 1985 Organizational Identity Research in Organizational Behavior, 7, 263-295
- 保育士養成課程検討委員会 2010 保育士養成課程等の改正について（中間まとめ） 厚生労働省 2-3
- 片桐義晴 1999 アイデンティティ形成における「他者」の意味－共生の教育へ向けて－. 早稲田大学大学院文学研究科紀要第1分冊45, 121-129.
- 小泉裕子・田爪宏二・Satomi, Izumi. 2007 保育者アイデンティティの形成に関する研究・実習生に見る反省的実践の検証－日本とアメリカの保育者モデルが及ぼすアイデンティティ形成要因の比較 鎌倉女子大学学術研究所報7, 75-86.
- 香曾我部琢（2012）少子化、過疎化が地方小規模自治体の保育者の成長に与える影響. 保育学研究50 (2), 12-25
- 森上史朗 2004 最近における保育の動向と課題 発達25, 98, 2-8. ミネルヴァ書房
- 中坪史典・小川晶・諏訪きぬ 2010 高学歴・高齢出産の母親支援における保育士の感情労働プロセス 乳幼児教育学研究19, 155-166.
- 西坂小百合・森下葉子 2009 保育者アイデンティティの形成過程－保育実践経験5・10年の幼稚園教諭に対するインタビュー調査から－ 立教女学院短期大学紀要41, 51-60.
- 西山修 2006a 子どもの社会性を育むことへの保育者効力感とアイデンティティ地位との関係 子ども社会研究12, 57-69.
- 西山修 2006b 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成 保育学研究44.2, 150-160.
- 西山修 2008 保育者のアイデンティティと効力感は保育実践に影響を及ぼすか－領域「人間関係」について－ 乳幼児教育学研究17, 19-28.
- 大條あこ 2009 保育者のアイデンティティ形成に関する考察3－「目標値」から見る保育者を目指す学生の保育者像－ 洗足論叢38, 169-178.
- 佐藤郁哉・山田真茂留 2004 制度と文化 日本経済新聞出版社, 94, 114-115.
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン＝ヴァルシナー 2006 複線径路・等至性モデル－人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して 質的心理学研究5, 255-275.
- 柴崎正行・足立里美 2009 保育者アイデンティティに関する研究の動向と展望－日本における保育者アイデンティティ研究－ 大妻女子大学家政系研究紀要45, 22-33.
- 諏訪きぬ 2001 21世紀の保育の創造と保育の課題. 諏訪きぬ編著. 改訂新版現代保育学入門、283-305.
- 谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造－多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成－ 教育心理学研究 49, 1, 265-273
- 高濱裕子 2000 保育者の熟達化プロセス：経験年数と事例に対する対応 発達心理学研究11, 3, 200-211.
- 高杉展 2009 保育の評価と苦情処理及び保育者の研修 森上史朗編著 保育原理 ミネルヴァ書房 165-177
- 田爪宏二・小泉裕子 2007 保育者アイデンティティの形成に関する研究：日本とアメリカの保育者モデルが及ぼすアイデンティティ形成要因の比較 鎌倉女子大学学術研究所報7, 75-86.
- Valsiner, J. & Sato, T. (2006). *Historically Structured Sampling (HSS): How can psychology's methodology become tuned in to the reality of the historical nature of cultural psychology?* In Straub, J. Kolbl, C. Weidemann, D. & Zielke, B. (Eds.) *Pursuit of meaning. Advances in cultural and cross-cultural psychology*. Bielefeld: Transcript Verlag. pp.215-251
- 境愛一郎、中西さやか、中坪史典（2012）子どもの経験を質的に描き出す試み－M-GTAとTEMの比較. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部61, PP.197-206
- 木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い. 弘文堂.
- 戈木グレイグヒル滋子（2006）グラウンデッド・セオリー・アプローチ－理論を生み出すまで. 新曜社.

（平成25年9月30日受理）